

おばけ

桜丘逢村

私は友人が多い方だと思う。たゆまぬ鍛錬によって身につけた社交力と、人知れぬ努力によって維持している寛容さのおかげで、私はどんな種類の人とも折り合いよくやっている。遊びの誘いは可能な限り受けることにしているし、宿題を手伝ってくれという頼みも快く引き受ける。漫画やCDも貸してやるし、もちろん金も貸す。地元のけちな友人は、休日になると電車通学をしている私の定期券を借りて、都市部まで遊びに行っている。私は勉強をし、フットボールをやり、バイクに乗り、漫画やゲーム、アニメなどを楽しみ、映画を観て、小説を読み、音楽を聴き、絵を描き、写真を撮り、そして酒を飲んだ。これだけの活動を幅広くやっておけば、大体の人と何かしらの話ができ、表面上仲良くすることができる。趣味の範囲は広いが浅い。人間関係においても同じことが言えるだろう。だがそれでも構わなかった。私は事なかれ主義の、弱い人間だった。何事も深く関わるよりは、そばで傍観している方が楽しかった。

しかしこの柔軟性のおかげで、私はずっと自分を守り続けることができていた。私にとって何よりも怖いこと、それは誘いがなくなることだ。私が唯一誇りとしていることは、どんな困難にあっても、誰にも相談せず、自分一人だけで苦しみ抜いたことである。また、どんな行事の場合にも、誰かしらが私を呼んでくれるということだ。つまり私は、自分から誰か友人を、遊びに誘ったり食事に誘ったりしたことが一度もない。勉強を手伝ってもらったこともなければ、看病をしてもらったこともない。問題は常に隠し続けてきた。ひっそり続けている創作活動（実はこれこそが本当の趣味なのだが、これは大きな秘め事で、一生隠し通すことに決めている）に没頭し、何日も睡眠不足、栄養不足である時でも、友人と遭遇すればすました表情でやり過ごす。全身がどれだけ硬直し、内臓が暴れていても、それが誰かに悟られることは、どういうわけか私にとっては罪であった。私は常に、他人の頭脳の中では、便利な人間でいたかった。健康な人間でいたかった。

しかしついに危機を迎えた。おばけである。

わたしもついに、友人たちが毎年苦しめられているあの、たちの悪いおばけに取り憑かれてしまった。いや、怪談を話そうというのではない。私のいうおばけというのは、友人が多いほど取り憑かれやすいものなのだ。私はこいつの存在をずっと意識していながら、毎年うまいこと避けていた。だが年月は私に思春期を迎えさせ、ついに私をこの化け物に屈服させようとしている。

状況を説明するために、まず他のおばけについて述べようと思う。私が漠然とこの恐ろしいものの存在を認識しはじめたのは、中学生の頃だと思う。私は周りの友人たちの行動によって、このものの存在を知った。こいつはどの季節、どの月にも現れる。中学になって最初に迎えた二月のことだった。既に子どもを脱したと自惚れているような餓鬼は、一斉に魔物に取り憑かれた。私は、こんなにも多くの友人を支配する、目に見えないもの・・・女子を一段とうるさくさせ、男子を妄想に駆り立てる幻の存在を感じた。すなわちバレンタインおばけである。

無論、この幻の命は短かった。衰退の電光石火ぶりに、私は自分の認識を、ただの考え過ぎだと判断した。このおばけの母親である、メディアにおいてなんとシーズンと過激報道される流行は、私も知ってはいたが、実際にそれに浸食された人間の群れの中に身を置くのは初めてであった。私もチョコレートは大好きである。しかし海外の文化を誤って解釈した連中が、二月の二週目を自分にとって何らかの一大事件が起る時期かのように捉えているのを見ていると、なんともやりきれない思いが湧いてきてしまったのである。私は十三歳において既に冷笑的になっていた。しかし彼らのこの愛すべき習性には興味を覚え、以後彼らが、その他のいろいろなおばけに翻弄されるのを楽しんで観察するようになった。

私はその後、季節ごとに現れる様々なおばけを見た。三月にはセンチメンタルおばけというのが出た。友人たちまた先輩たちは、日頃の悪ふざけはどこへやら、周囲のものにやたらと感動し感謝して、一種の幸福病の状態になる。行事や内輪のイベントが増えて、狭い町のそこここで青春劇的な場面が展開されているらしい。無論彼らはそういう寸劇における振る舞い方を、テレビの前で一生懸命勉強していたのである。

四月は新生活おばけというのが出た。他に呼び方がわからないのでこのような変な名前をつけてしまったが、人によって呼び方は様々だろう。猿まねが好きな奴らは、これからの自分の成長に黄金の期待を感じていた。友人たちは習い事を増やし、塾に通い始めた。都会まで行って服を買い、駅まえにたむろしてそのお洒落ぶりを見せつけていた。用もないのに携帯電話を開いていた。女子は化粧道具を見せ合っていた。早々に部活をやめた友人たちは、ギターを始めた。彼らの目は輝いていた。何もかもがうまくいくように見えていた。

五月になると、そういった雰囲気も落ち着いて、湿気を帯びた空気に引きずられて、彼らは沈んでいった。妙に大人びて、厭世的になった様子で、覚え立ての難しい言葉を使って目立とうとしているのが可愛らしかった。なんて影響の受けやすい、繊細な動物だろうか！？常に流れに乗っていないと落ち着かないのだろう。期待とは裏腹に短調に過ぎていく毎日に疑問を抱き始めている。しかし、それを解決しようとはしないのだ。いつも誰かが解決してくれるだろうと思っているのだ。

六月は何もなかった。この頃になる新生活おばけもやっと勢いを失って、彼らは元に戻った。退屈で何も起らず、しかしそれが故に平和だった。強いていうなら平和おばけというのがいたのだろう。五月の頃を感じていた疑問もすっかり忘れて、皆一様に刺激のない生活を繰り返していた。最近ある先輩から聞いた話だが、同期がこの時期を過ぎてから急に結婚おばけというのに取り憑かれたらしい。だがそれについて私は詳しくない。

さて七月、八月、九月である。おばけは活性化する。お祭りおばけ、花火大会おばけ、キャンプおばけ、旅行おばけ、コンサートおばけ、文化祭おばけなどがあちこちで乱を起こす。とにかく遊ばなくてはいけない。一緒に何かする友人を見つけて、予定を埋め、後で、あの時は誰それとどこで何をしていたのよ、と明確に答えられるように準備しなければならない。私という存在はこういう時に一番役に立った。人数合わせはお手の物だった。私は誰の誘いも断らなかつた。私は彼ら在必死で規格化された人工的な思い出を生産する手伝いをした。私は彼らの交際力を証明するためだけに呼ばれていた。しかし私は、彼らを見ているだけで実に愉快だったので、そんな扱われ方をされても一向に構わなかつた。

十月は夏の勢いに比べるとおとなしかったが、それでも最後にやってくるのがハロウィンおぼけである。学校には変な袋にいっぱい詰め込まれた外国風のまずいおかしが溢れかえった。私はいいかげん意味がわからなかった。友人の全員が帰国子女なのかと思ったくらいだ。もちろん彼らは、テレビと雑誌によってそれを知っていると自負しているのである。友人たちの心いつの間にか植え付けられた、海外文化をやたらと知ったかぶってまねて、流行を追う義務感というのは、思春期を迎える頃から爆発的にふくれあがり、その行動はしばしば滑稽なほど模倣的で、盲目的で、慣習的にならざるを得ないようだ。日本人という生物は本当にまねが大好きなのだ、としみじみ思った。そして何より哀れなのは、彼らの無意味な義務感が、欠かせない経済力の一部であるということだ。

だがこれらのおぼけは全て序の口であった。年末に潜むあの、若者だけでなくほとんど全ての日本人を苦しめているであろうあの最凶のおぼけが、はっきりと足音を立てて近づいてきている。世の人の会話は全てこれに支配される。諸外国においてそれは純粋に楽しい祝い事である。しかし日本人のそれは不健康極まりない！ああ、美しかった幼年時代！あの頃だったら、イギリス人やアメリカ人やオーストラリア人のように、ただ豪華な食べ物と贈り物に胸をはずませ、家族の優しさに包まれ、われわれ子どもは無垢なる喜びに満たされてその時を迎えたのであった。しかし見よ！大人になりかけの少年少女たちの憂いに満ちた表情を！彼らは何を心配している？何を恐れている？誰を？なぜ？さよう、クリスマスおぼけである。この悪魔は、一定の年齢を過ぎた人間に突然牙をむいて襲いかかるようになる。

十一月の半ばのことである。私は電車に乗って、若いおなご二人がやや興奮気味に、しかし憂鬱気味に話しているのを聞いてしまった。すなわち来月の24日から25日にかけての予定作りについてである。彼女たちは既に一緒に過ごす相手をつまめるため人心工作を始めているが、なかなかうまくいっていないらしい。この段階が過ぎなければ、この時期にだけ許される過度の幸福病を意図的に発症させることは困難になり、逆にひねくれ病を発症させてしまう。

「はあ・・・本当にどうしよう。この前飲み会で、先輩に男の方を紹介してもらったことになったんだけど。その、ねえ、来月のあれのためにねえ」

「あら、よかったじゃない。私もはらはらしていたけど、ようやく会食する相手が決まりましたのよ。複数ですがね。でも仕方ないわ。でなければあやうくアルバイトを入れて、やむを得ない口実を作らなければならないところだったもの」

「いや、それはあなた、すごくよかったじゃないの。私の方は、実はねえ、微妙なのよ。もしかその先輩自身が私を狙ってるんじゃないかって。彼、お車が趣味らしくて、代わりに自分にも誰か車が好きな人を紹介してよって、求めてくるんですけど、そんなお友達いるわけないし、その言い方が、なんとも嘘くさくて、本当はご紹介できるお友達なんかなくて、ただ私と会う機会をつくりたいだけなのではないかしら？趣味なんていくらでも捏造できますでしょう？それに、わざと不器量な方を連れてきて、自分の評価をあげようって腹かもしれませんのよ。心配だわ」

もちろん、ここには誇張がある。彼女たちは全くこんなしゃべり方はしていない。しかし内容はあっているし、そもそも彼女たちの耳障りな音声は、こうやって無理矢理にでも変換しないと書き起こせないのである。時勢は既に、電腦空間での業績報告を当然とする悪習を若者にすり込んでいるので、個々の行事で自分がどんな活躍をしたか説明できなければ恥なのである。もし「一人だった」などと白状してみたまえ。君は見限られ、評判は地に落ちるだろう。君は根暗ということになり、気むずかし屋、堅物の称号が与えられ、周囲との壁は一気に厚くなるだろう。この恐るべき習性は、女性の方に顕著にみられるようである。

男の方の会話の例はというと、残念ながら書けない。街中で耳にしたが、あまりに愚劣、卑劣を究め、思い出すだけでも嘔吐しそうになるからである。もしどうしてもお望みであれば、賑やかで汚い都会の夜、娯楽施設のどこかにでも入れればよい。君の心がものの数秒でかき乱され、笑えないようであつたら、君は既におばけに取り憑かれている。

しかし私にとってもこれが他人事でなくなる時が来てしまったのだ。18の年までしれっと流してきたのだが。中学の初めの二年は部活、最後の年は受験勉強ということで関係なかった。高校でも同じだ。色気づいた連中は早々に取り憑かれて身を滅ぼしている様子だったが、私は意図的に純朴を捨てず、部活と受験勉強で通りぬけた。しかし今年、ついに言訳が立たない身分になってしまったのだ。

今や私は19の学生である。そして、もっとも恐れている時がやってきた。部活は通じない。気楽なサークルに入ったのだ。大学でも部活根性を保てるほど、私は強くなかった。勉強もおかしい。勉強だけしていれば体面を保つことのできた時期は終わったのだ。電車に乗っていた女子の片割れはアルバイトを口実にしようとしていたな。しかし私はアルバイトが大嫌いなのだ。これに命をかけては多忙を自負し、暇のなさを自虐しているくせに内心誇りにして偉そうな顔をする奴、これをせぬものを人間扱いしない輩が跋扈しているのを知ったため、私はこういう連中にはなりたくはないと思ってしまったのである。自分にできる以下の仕事、それも明らかに成長の見込みのない仕事に妥協していたずらに暇をつぶすのは怠惰だと思った。自分を犠牲にして金をもらっていれば立派だと錯覚するほど私は感傷的ではなかった。

私はついに自分で動かなければならなかった。わたしはおばけに取り憑かれたのだ。大学に入って一年目、新しい友人たちとの交際が進行し、それぞれが長い関係の続かないだろうと判断した人間に見切りを付けている時期である。私が所属するいくつかの団体内では既に派閥ができあがっていた。私はその全ての人間に関与しているように装っていた。そこで、私が一番好ましく思っている団体と行動をともにし、あらゆる学生活動中、さりげなく、自分が天性然るべき時に誘われる存在であることをほのめかした。この団体には男も女もいたが、私は誰とでも仲良くした。どちらかというとなりに好かれる方ではあるが、女友達もいた。

男も女も、素敵な異性と二人だけで過ごすことを夢見ていた。どの場面の会話でも下心と虚栄心が垣間見え、私はうんざりした。彼らの大体は、傲慢にも、既存の友人のうち、交際の発展を望まないでもないという異性を適当に選び、無意味な策略と心の裏読みを繰り返したあげく絶望して、結局大人数でばか騒ぎすることに決めたようだ。私は広い人間関係を求めていたが、彼らのように駆け引きによって友好を得ようというやり方はできなかった。私はただ正直に話し、静かに聞いた。嘘は一言もいわなかった。偽善というよりもっと頭の悪く見える態度で接した。要するにお人好しの寂しがり屋というわけである。

ともかくも、私は誘いを一つ受けた。伊達に広く根を張り巡らしていたわけではない。私は遊び仲間として安定した関係を築いていたベックという美青年に、ある大人気漫画の映画を見に行こうと誘われた。私は小学校の頃から毎週少年誌を買っていて、その漫画を読み続けている。これが当たった。彼はこの漫画が好きだった。私の他に誘われた者があと二人いて、男が一人、女が一人だった。ベックは仲間内で大変な人気者で、あらゆる活動に精を出す野心家だったが、また相当な女たらしで、少し下品な男だった。しかし彼と付き合っておけば、自分が友人たちの認識から漏れることはなかった。私は熱心に彼の趣味との同調を図っており、既に向こう数年間の友好は確実なものとなっていた。私は、他に彼が誘った二人とは、面識が少なかったものの、この映画鑑賞によって少し仲良くなった。その日、私がクリスマスおばけに悩まされていることを打ち明ける前に、ベックは年末お楽しみ計画を企てていることを私たちに話した。そして彼の口から直接遊びの計画を聞くことができた人間は、計画に参加することを許されているのである。私は「いいなあ、いきたい」と言い、参加が決まった。あとの二人はプライドが高いらしく、手帳を自分にしか見えないように広げてきょろきょろしていたが、結局「いってもいいよ」と言った。

こうして私は安心を得た。おばけは消え失せたかのように見えた。未だに一緒に過ごす相手の決まらない多くの連中の焦りを見て、憐憫を覚えた。彼らは別段惨めな格好をしているわけではなし、頭の切れる、清潔で人好きのする普通の連中だったが、やたらと熱っぽくてそわそわしすぎていた。学内の浮ついた空気に毒され、ばかげた妄想に夢中になっていた。自分は寂しがりどもたちのパーティーなんぞに参加するほど子どもではないのだとでも言いたそうな物腰であった。私は頑固に純真家を突き通す彼らに、思わず説教しそうになった。孤独を強める悪習には立ち向かうより、屈服する方が精神には良いのだ。孤独を避けられないことがわかっているのなら、60億の中で感ずるより10の中で感ずる方を、選ばない理由はない。しかし私は何も言わなかった。そういう気むずかし屋をベックは好まない。企画のことをしゃべりでもしたら、私は絶縁されてしまうだろう。私は、自分が誘われたことにすっかりほっとして、当日どこで、何時に、誰と集まって何をするかなどということに全く無関心であった。

ベックが私の部屋を使うつもりでいたことを知ったのは、例の日の二日前だった。私は驚いた。仲間内で一人部屋を借りているのは私だけであった。そして彼らはこんな時期でなくとも常に遊んでいるため、金を持っていなかった。ポーキーくんが私を誘った裏には、確実な場所と寝床の確保という魂胆があったのだ。彼は私の性格を見抜いていたに違いない。私が断らないのを知っていて、開催の場所の決定を遅らせたのだ。私を早めに誘っていたのも、私の部屋を誰か他の奴にとられないように用心しての行動であった。

私は鈍感であった。仲間内ではベックたちが例の日にどこで遊ぶのかということが話題になっていたというのに。私は、ベックのことだから、どこか適当な娯楽施設でも勝手に予約して大勢の友人を呼ぶのだと思っていた。だが彼は何もしていなかった。彼はその人気を利用してただ人集めをするのを楽しんだだけであった。そのうち友人に会う度に「よお、楽しみにしてるぜ」とか「おまえの部屋はきれいなんだろうな」とか言われ、私は混乱した。いつの間にか私の部屋に何人もの友人が集まって食事会をするということになっていた。迂闊だった。自分だけではなく、友人たちがおばけをどう処理しているかに注意すべきであった。結局私一人で、何人もの友人のおばけを追い払うはめになってしまった。

私はベックに会い、いかにも無知を装って計画の詳細を尋ねた。彼は言った。「どこにしよう？お鍋料理でも食べたいと思ってけっこう誘ってはいるんだけど、誰か一人暮らしの奴はいたっけな？入れてくれそうな奴は・・・」と次に彼は本気で悩んでいるような様子で「やばい。場所のこと忘れていたなあ」とわざとらしく言った。私は「ぼくの部屋でやるといい」と言わざるを得なかった。これが空気を読むということであるが、私はこの時ほど自己犠牲精神を発揮したことはないと思った。

こうして私はやりきれない気持ちで24日を迎えた。自分の部屋に10人も人間が飲み食いに来て酔って寝る。それは一つの災害に違いない。しかしベックは、私が内心苦しい思いで場所を提供したことを察してくれたらしい。なるべく私が気をもまないように、また私を喜ばせるように事が進むようにしてくれた。買物や料理、その他お楽しみ事の準備などは全部引き受けてくれた。また、私が好意を抱く人を呼んでやるとも言った。私は困った。呼びたくない人間は山ほどいるのだが、特別に会いたい人間などいなかった。いないと言う訳にもいかないのに、美人の女友達の名を挙げて切り抜けようとしたが、他の男どもが私の家で恋愛を仕掛けようとする可能性もなくはないので、それは言えず、結局「平和な人がいい」というなんとも曖昧な返事をしてしまった。しかしベックは、私のために、まさに誰もが一緒に過ごしたいと思うような美人を二人も誘ってしまった。しかもこれが都会育ちの隙のない女で、しばしばその洗練されすぎた美貌の故に敬遠される類の、完全無欠な女学生であった。私は彼女たちを誘ったベックの巧みな話術を想像することはできなかった。

しかしこのことによって私は嬉しくなってしまった。思いもよらぬ幸運であった。男でも女でも、美人と過ごすのは気分のよいことである。それに、私は男性よりも女性と過ごす方が楽であった。いつも野蛮な暴言を吐き悪ふざけばかりしている男友達と一緒にいるのは、笑える楽しさはあるが、疲れるものである。私は女性と話す時に、心が平靜になるのを感じた。自分で話すのは苦手であったが、話を聞いているのは得意であった。私は色々と勘ぐられるのが嫌なので、女性にも男性にもよく告白事をした。男性女性構わずあまりに多くの人に「好きだ」と言ってしまうので、一時私はバイセクシャルかあるいは馬鹿者ということになっていたが、親切をするだけで特に込み入った事件も起こさなかったので、すぐに私はただのお人好しであると定められた。友人たちが常識だと考えているあの、異性に友人以上の契約関係を求める告白事は、しばしば若者の最大の関心事となり、意地悪な連中に噂話の種を提供しているが、私にはこの常識が欠如していたのである。私は奔放に遊ぶ人が好きだった。盲目的に契約だけ取り付けて青春の義務を果たしたように自惚れている者どもは、浅はかであつたらなかった。私は恋人には、誰と遊んでいても構わないどころか、積極的にいろいろな人と付き合っしてほしいと思っていた。そういう人が好きだった。

ベックが誘った二人は、この性質を持っていた。私にとって嫌う理由は何一つない。嫉妬深いものは彼女たちを残念な人とかもったいない人とか、悪いときはビッチと呼ぶこともあったが、彼女たちは不細工と頑固者の排撃などものともしなかった。彼女たちは交際好きなので、ベックの他にも誘いを受けていたらしいが、散々きれいごとを並べ立てた挙げ句いやらしい欲求をぶつけてくる偽善者のやり方には飽きていたらしく、私たちの集いの方を選んだようだ。

私は心の中でベックに感謝していた。もうおぼけのことなど忘れていた。しかしやはり、別の人物に取り憑いたおぼけたちが私を苦しませることになった。その日ちょっとした用事があった、午前中に学校にいった。ついに何の約束も取り付けられなかった哀れな連中が集まってきているらしく、おまえもか、おまえもか、といっちはそこかしこで徒党をくみ、自暴自棄になっていた。学内だというのに昼間から缶の安酒を飲んで、汚い言葉を連発していた。かわいそうに、皆おぼけにやられたのだ。まったく、超然としていられる奴はいないのか。いまから音を上げているようでは、これから襲ってくる忘年会おぼけや年賀状おぼけや初詣おぼけやお正月セールおぼけなどにも、心身を貪り食われるだろう。そんな彼らに哀れみの視線をやらないように注意しながら歩いていると、ベックに会った。私は元気よく挨拶をしたが、彼はそっと息を吸って「ああ、いや実は」と言った。様子がおかしいので、嫌な予感がした。すぐに彼は「今日、ポーキーも来る」と言った。私は何も気にしていない様子で「わかった」と言ったが、激しく落胆していた。ポーキーくんとは、私とベック、それから一緒に映画館に行った二人と、先ほどの女子が所属するクラブの、中心人物の一人である。彼の周りにはいつも人がいるが、それは彼の役職のためであり、彼は集団を取り締まる才能によって、自分が慕われていると思い込んでいるのであった。皆は確かに彼を頼っていた。しかし我々は彼のご機嫌取りをしたくはなかった。彼は一年間、自己犠牲精神を貫いて、自分の学生生活の節目節目を輝かしい美德で装飾していたので、この時期こそは、誰よりも自分が一番ほめられるべきであり、多少度が過ぎるくらいはめをはずすのが当然だと思っている人物であった。クラブの連中にとって、誰が彼の接待を引き受けるか、ということは当面の大きな課題であったのだが、ベックはそのことを全く無視していた。私の方はというと、彼の仕事量の凄さに軽率にも敬意を表してしまったことがあったので、すっかり気に入られてしまっていたのだが、そのことを忘れていた。彼を尊敬する私の部屋で催し物が行われるとあっては、当然自分も参加してよいものとポーキーくんが思うのはわかりきっていた。だからベックは黙っていたのだ。しかし、どういうわけかポーキーくんはベック企画を知っており、誘われずとも自分が参加するのが当たり前と思っていたらしい。彼は先ほどベックに会うと「今日楽しみだな」と言ったのだ。この瞬間、ベックは、ポーキーくんがクラブ内の連中全てにずる賢く探りを入れてそれぞれの宴会計画を知り、自分を労ってくれる集いを自分たちのものに定めたのだということを悟った。ポーキーくんがいなければクラブ活動は成り立っていないことはわかっているので、我々は彼を拒否することなどできない。

「あのいまましいデブ！」ベックは怒鳴った。「おれたちが拾うはめになるとは。あいつが来るってことを知ったら、女の子は誰も来ないな」

私は「ぼくは構わないけど」と言った。本当は泣き出したかった。

案の定、私の好きな子らは来ないことになった。彼女たちは直感を働かせて、ベックに今日集まるのは誰なのか聞き出してしまった。ポーキーくんの名を聞くと、あっさりと「行かない」と言ったそうである。彼女たちは、ポーキーくんを回避した連中で集まって楽しく遊んだのであろう。私にとっての悲劇は、自分の部屋へ招く許可を出してしまっていたので、逃げ場がないことであった。誰であろうが来たら入れねばならなかったのだ。ポーキーくんが他にも寂しい奴らを連れてこないとも限らなかった。私は午前中に学校で見かけた不気味な連中を思い出してしまった。あんなに見苦しい奴らの輪の中にいるのなら、一人だってよいと思った。私は自分のお人好しを呪った。まんまとおばけに食われてしまった。

私とベックは地獄の夜を過ごした。結局ポーキーくんは一人で来たが、ベックが呼んだ連中は全員逃げた。私たちは二人でこのデブを接待せねばならなかった。ポーキーくんはこれがベックの企画ということで、華やかな美人学生の集まる賑やかな会だろうと見越していたらしいが、予想が外れたとわかると、あからさまに不機嫌になった。ベックは人数が減ったので中止にしようと言ったが、ポーキーくんはせっかく来たのだから三人で飲むと言い出した。私とベックだけなら、急でもなんとか他の友人たちの会に入っていくこともできたかもしれないが、ポーキーくんを受け入れる者がいないことは、わかりきっていた。私たちはポーキーくんの相手をしなければならなかった。

ポーキーくんは一人で8人分の肉を食った。その後に8人分の酒を飲んだ。私たちは延々と彼の苦労話と武勇伝を聞いてやった。私とベックが不真面目に遊んでばかりいるのに女の子と仲良くしているのが悔しいらしかった。ポーキーだってクラブ活動をしている時は女の子と仲よくしゃべっているじゃないか。真面目で、誰よりも仕事をするって、いつも褒められているじゃないか、と私たちは言った。だったらなんで誰も遊びに誘ってくれないのだ、とデブはごねた。

私たちは耐えた。ポーキーくんが眠りに落ちるまで我慢強く話を聞いてやった。ようやく寝ると、私とベックは外に出た。その場にいたらデブを殺しかねないからだった。

「結局あれは女の子の体をさわることしか考えていなかったんだ」ベックは言った。「大学のサークルなら醜男でも可愛い女の子と仲良くすることができると思っているんだろう。あいつは女子大生という幻想に騙されているのさ。美人な女子学生なんて全員ビッチだ。誰にでも可愛い顔をして、学内活動の場では仲間みんなを愛しているように見せておいて、いざとなると今日みたいにトンスラだ。俺たちだけに世話させやがって。薄情で冷たい奴らだ」

「女学生おばけだね」

「あん？なんだそれ？」

「美人で活発な大学生が、学内でいつも清楚で、優雅で、誰にでも優しく笑顔を振る舞い、親しげにしているのは、単に大人社会に出たときの予行練習をしているだけなのに、ポーキーくんみたいな人は、それをただ欲望を満たす機会が広がっただけとしか思っていないんだ。彼女たちの寛容さが、自分自身でなく、自分の後ろにある集団の意志に向けられていることに気付かないのだね。自分一人だけを見てくれていると勘違いしているんだ。それで、彼女たちを自分のものにしてもよいと、思うわけさ」

「今日くるはずだった女子たちは、みんな美人だぜ。寛容だったら来るはずじゃあないのかい？」

「そのはずだ。だが忘れちゃいけないよ。僕たちも、今は普通の寛容を失っている。君、さっきあやうくあいつの頭にビール瓶を落とすところだったじゃないか。ぼくでさえ、今出てくるときに、わざと暖房を消して、あいつの腹に布団を掛けてやることさえしなかった。彼女たちだって、今日が12月24日じゃなかったら、我慢してぼくたちと一緒にポーキーくんの接待をしてくれたはずだ。彼はクラブ内の雑務全部をしてくれるから、大切な存在だものね。わかるだろ。今ぼくたちは全員、心が狭くなっている。クリスマスおばけが居座っているからさ」